



# ポルティコの広場

## ネットワーキングすること～新潟県中越大震災の経験から

新潟県立看護大学学長 中島紀恵子

7.13の大水害、10.23の中越地震被災（「新潟県中越大震災」に統一）のダブルパンチに遭遇した人々の土地のすぐ近くにありながらわが大学は無傷でした。しかし、早々と全国の関係機関からお見舞いをいただきました。学長としては、「幸いなことに…」といった挨拶をする言葉の数だけ被災地や被災者に対して何とも言いようのない後ろめたさを感じたものです。大学として、ただちにできることは、教職員や学生のボランティア活動を支援することですが、大学にはこれ以外にも大切な役割があります。それは、大学の普段のネットワーク機能を新潟県中越大震災被災地支援にむけてネットワーキングする役割です。

ネットワークにingをつけたネットワーキングは単にネットワークの形成過程を意味するだけでなく、大学全体の目的達成のために個々のメンバーが存在するという考えに基づいた組織原理にingがついたものでもなく、個と個の関係、その関係の中で、その人たちの考えやコンセプトが作られていく姿・形を学外にも示し、協力し合う関係を築いていく役割です。

学長として私は、初めて体験する強い震度や余震を共時した「学園の場」にいる個々人の考えやテンションの高低を積極的に認め合うなかで、教職員や学生がネットワーキングしていることを社会に示し、他にあるネットワークたちとネットワーキングしていく姿・形をサポートしたいと思いました。それで、広報委員会にホームページを立ち上げてもらいました。むろん初めにホームページありきではありません。

それにしても阪神淡路大震災に較べて新潟県中越大震災へのボランティアの出足は早かった。なかでも阪神からの医療看護

班は驚くほど迅速でした。わが大学教員ボランティアの話ですと、この人々が過去の経験をもとにして、自発的に指導的役割を果たしていたということです。日本看護協会でも2001年に作っていた「災害ネットワークシステム」を初稼働させ、厚労省との協議により、震災から2週間の間に新潟県と全国の看護職631人が被災地に入ったということです。わが大学の教職員・学生も延100人以上くらいは現地に出向きました。そこでは、「生活者としての人間」「一人ひとりの個性の尊重」「人間の多様な価値観」といった言葉を血肉化する体験とボランティアする喜びを経験したはずで

余震もどうやらおさまりましたが、被災者、被災地が失った日常をとりもどすまでの長い時間に私たちはずっと寄り添って、個人としてできることと、大学だからこそしなければならないことの両方の探索行動を続けています。



緊急ヘリポートとなった本学校庭、左上は搬送先の県立中央病院



今年度、新潟県は夏の水害、この度の震災と、中越地方を中心に大きな被害を受けました。本学でもこの事態に心を痛めながら、教職員、学生ともども、自分たちができる支援活動を模索してきました。

## 7.13新潟豪雨災害ボランティアを経験して

第2学年 大竹 康晴

7月13日の三条市を中心とした豪雨の後、私はテレビで全国から災害ボランティアが被災地に入り活躍しているというニュースを見ました。これを見て、私は少しでも役に立ちたいと思っていたので友達2人と一緒に被災地に行き、ボランティアに参加することを決めました。

私たちが行ったのは、中之島町の最も被害の大きかった決壊した堤防の近くの寺院でした。被害はテレビで見たものよりもひどいもので、家の一階は流され、墓石も泥に埋もれていて、辺りは元々何があったのかわからないほどにすべて流され、泥や土砂に埋もれていました。その中で、平日にもかかわらず多くの人たちが黙々と作業をしていました。私たちは泥や土砂をスコップで掘り運ぶ作業をしました。炎天下の中での作業だったので過酷なものでしたが、周りの人たちが頑張っている姿や被災地の人々も頑張っている様子を見ると、やらないではいられないという気持ちになりました。

今回一日という短いボランティアでしたが、人々が助け合うことの素晴らしさなど心地よい疲労感とともに多くのことを学ぶことができました。この体験を大切に今後活かしていきたいと思います。

## 新潟県中越大震災：川口町ボランティアセンターでの活動報告

実践基礎看護学 助手 岡村 典子

11月5日(金)早朝、3年生4名(園田理奈、内藤みほ、星揚子、福田萌)と教員3名(斉藤智子、籠玲子、岡村典子)は、何ができるのだろうかという不安を抱えながら、川口町ボランティアセンターへと向かいました。徐々に、救援物資も届きボランティアの数も増えていく中、私たちはとにかく現地に行って今自分たちができることを精一杯してこようという思いでした。

ボランティアセンターの受付にて登録後、学生4名は被災地の子どもたちに対する支援活動へ、教員3名は老人憩いの家「末広荘」に避難されている高齢者の方のケアに向かいました。ここでは、学生、教員の活動をかいつまんでご報告します。

### 【学生の活動について】

学生4名は、2名ずつに分かれて支援活動に参加しました。一つのグループは、被災地の子どもたち(主に小学校1、2年生)と想像し遊んだようです。「子どもたちは、とっても元気でした。」と少々バテ気味でしたが、子どもたちが元気になる活動に協力することができたようです。その他に、11月8日(月)からの学校開始に向けて校舎内の復旧のお手伝いもしたとのことでした。

もう一つのグループは、活動中にボランティアセンターの方で把握していなかった避難所が見つかり、そこで避難されていた高齢者の方のお話をお聞きしたようです。「お話が次から次へと出てきました。」との報告から、被災された方の抱えていた思いを少しでも軽くするお手伝いできたのかなと思います。

### 【教員の活動について】

教員3名は、避難された高齢者の方がいる「末広荘」に行きました。末広荘は震災による被害はなく、1階には避難された方々が生活を、2階は川口町に来られている保健・医療チームの拠点になっていました。1階の避難所には、川口町の介護関係職員の方2～3名のほか、ボランティアとして茨城県看護協会の看護師2～3名、鹿児島県のクリニックから看護師3名と介護士1名の方々が1週間前より活動されていました。

避難されている高齢者の方は約30名で、ほとんどの方は、日常生活行動に支障は見られませんでした。麻痺等の障害のある方や歩行に少しお手伝いがある方がいらっしゃいました。

そのなかで、私たちはお話を伺ったり、昼食の配膳、食器の後片付け、入浴の介助といった活動を行いました。皆さんは、敷かれた布団の上でテレビを見たり、折り紙を折ったり、お話をされたりして過ごされていました。震災については「おっかなかった。」と話されていましたが、難聴の方とお話する際、周囲の人への気兼ねから思うようにお話が聞けず申し訳なく思っています。

午後からは、魚野川の河川敷沿いに設営された自衛隊の入浴施設に行き入浴の介助を行いました。河川敷沿いは、山古志村の天然ダムによる土石流災害を避けるため、避難された方々のテントは撤去されていました。お天気はよかったです。災害の可能性のあるなかで入浴するという状況でした。入浴用の浴槽はとて深く、高齢者の方は浴槽の中にも足台がないと入れない状況でした。そこで、浴槽の中にも足台として用意されていたビール瓶の空きケースを入れ、自衛隊の女性隊員の方もお借りしながら、介助した方々にも湯船につかっていただきました。「あ～、気持ちいい。」と安堵された表情をみて、とてもうれしく思いました。入浴介助中にも余震がありました。大きな揺れではなかったため大人の方は比較的冷静でしたが、湯船で遊んでいた子どもは「地震だ!」と言って怯えた目をしていました。その表情から、子どもたちの心のケアの必要性を強く感じるとともに、一日でも早く安心して生活できる日がくることを願わずにはいられませんでした。

それぞれの活動終了後、16時からのボランティアセンターの反省会ミーティングに参加しました。そこでは、幾つかの活動報告と今後の課題が話し合われました。そのなかで、ボランティアセンターの方が「ボランティアのためのボランティアがいることを忘れないように」と言った言葉が印象的でした。

(本学ホームページより筆者の許可を得て転載)

## 図書館に「災害看護・地震関係資料コーナー」設置

図書館司書 阿部 昌子

災害看護・地震関係資料のコーナーを図書館新着図書棚に設置しました。一般に手に入る本だけではなく、阪神・淡路大震災時の他大学の報告書、県の防災計画書など、非売品も収集するよう努力しています。また、文献リストを作成、ホームページに掲載しています。これは当館で所蔵している資料だけではなく、「医学中央雑誌」という国内最大のデータベースからダウンロードした災害看護に関する雑誌論文の一覧を、発行元の許諾を得て掲載しています。

当館は学外者にも公開、貸出を行っておりますが、遠方から来館できない方からの資料利用申込も、病院図書室・市町村立図書館などを通じて受け付けています。現場の看護職の方々には被災者の看護に忙しく、文献検索をしている時間はなかなかとれないようです。そういった方々にもご利用いただければと思っています。



図書館に設置された資料コーナー

研究事業部門

1. 研究報告会の開催

平成16年6月24日(木)、17時30分から20時まで、学内外の研究員の参加を得て、研究報告会が開催されました。第1セッション(座長:吉山班長)は「豪雪地帯のヘルスケアニーズに基づく実践の優先度評価に関する研究開発」を課題とする4題、第2セッション(座長:富川班長)は「継続看護における連携システムの構築」を課題とする5

題、第3セッション(座長:橋本班長)は「ヘルスケア分野の専門職のためのメタデータウェアハウスの構築」を課題とする5題が報告されました。

2. 平成16年度 地域課題研究

今年度の地域課題研究の予算配分を決定しました。採択課題は下記の通りです。



熱心に耳を傾ける報告会参加者

	研究代表者	平成16年度地域課題研究：研究テーマ
分野1	野地 有子	農村地域における中高年女性の健康課題の分析とまちの保健室開設にむけたアクション・リサーチ
	佐々木美佐子	豪雪地における高齢者のソーシャル・サポート・システム構築とその成果に関する研究
	杉田 収	地域のヘルスケア・ニーズに基づく住環境支援～豪雪地域での脊髄損傷患者用住宅への提案
分野2	加藤 光寛	継続看護における連携システムの構築～成人看護における検討
	井上みゆき	医療的ケアを必要とする子どもの医療・教育・福祉の連携に関する研究
	加城貴美子	妊産褥婦と乳幼児の支援システム構築に関する研究
分野3	加藤 光寛	看護職臨床指導者養成講習会における看護職の臨床能力向上のためのプログラム開発～PBLチュートリアル教授法を取り入れて
	深澤佳代子	新潟県下の救急患者看護に従事する看護者を支援する教育プログラムの開発

生涯学習・研修支援部門

1. 一般公開講座 特別講演「看護政策の課題と展望」

平成16年7月10日(土)に開催された田村やよひ氏(厚生労働省医政局看護課長)による「看護政策の課題と展望」と題した特別講演は、質問と応答を加えて、所定の時間を延長した大変興味深いものでした。

内容は、保健医療福祉システムの改革から始まり、看護政策における近未来の課題についてパワーポイントをいながら説明し、さらにはまとめて代えて看護師の業務、看護師の業務と医師の指示ということに関して、法律面からの客観的な分析と現状のギャップについて鋭い指摘をされました。

看護職の就業者の現状では、日本の施設内医療中心の問題点に触れながら、とりわけ訪問看護ステーションの看護師が減少していることを懸念しながら、デンマークの看護職は30%が訪問看護に携わっていることを指摘したことが印象的でした。



ご講演中の田村氏

受講者からは、特に看護職をやめていく新人の多さや外国人看護師の受け入れに関する情報などから、看護職としてのアイデンティティの育成にどのように取り組んでいったらよいのか、などの意見がアンケートの結果からうかがわれ、看護の動向が見えてきたとすると高い評価を得ることができました。

(本学ホームページより転載)

2. 一般公開講座「ナースの時代から現代看護を読む」の企画に携わって

実践基礎看護学 講師 水口 陽子

本学の一般公開講座で、今年度はナースを取り上げたいというお話がありました。彼女の思想家としての面は「クリミアの天使」のイメージ程には浸透していません。そこで、看護研究交流センター・センター長、生涯学習・研修支援事業担当の先生方と相談しながら準備し、私の母校である千葉大学看護学部や学会で御

縁があった先生方の御賛同を頂くことができました。ナース研究センター・所長の小南吉彦先生は、看護思想について、病気と病人をみる看護の視点から御講義をしてくださり、山本利江先生は千葉大学で看護教育に携わっている立場から、著作から読み取った内容を資料に示しながらお話してくださいました。同大学の太田節子先生は、ナースが注目した環境の要素を取り上げて説明してくださいました。水口は、彼女が女性の持てる力を働かせるように呼びかけた経緯について話し致しました。市民の方、医療関係者の方、学生など全回で290名の参加があり、ナースの考え方の原点を学ぶことができたなどの感想があり、この企画に御協力致しました立場から一安心しております。

3. 専門講座「看護研究の基礎知識」の講師をつとめて

基礎看護学 助教授 朝倉 京子  
老年看護学 助教授 北川 公子

さる7月10日(土)と11日(日)、本学教員の朝倉と北川が、看護研究交流センター、生涯学習研修部門の「看護研究の基礎知識」(合計9時間)を担当しました。

10日は、「看護研究の意義と役割」をテーマに、近年の看護研究の動向を紹介するとともに、実践現場で研究に取り組むことの意義、面白さと困難さについて北川が解説しました。実践の中から見出した貴重な「疑問」を、研究に仕立て上げるプロセスを支えるモチベーションの持続に多少なりとも貢献することを期待し、講義内容を構成しました。

続く11日は、「看護研究の基礎」および「研究方法の選択」をテーマに、研究に値するトピックを探するという研究のスタート地点から、研究の結果をまとめて発表するまでの一連のプロセスを朝倉がお話ししました。この企画は、昨年に行っていますが、昨年度の講義内容に加えて今年度は、質的研究と量的研究における科学的推論方法について解説しました。また、研究のプロセスにおいて研究者が現象を捉える行為を、人間の知覚の特徴から考察しました。これらの内容は、講義に参加した看護職の皆様が看護研究をより深く理解するための一つの手がかりになったのではないかと考えております。

今後も、看護職の皆様が臨床実践に役立つ看護研究を楽しく行えるために本学の教員が出来ることを考え、実践していきたいと思っております。

#### 4. 専門講座「看護英会話セミナー」

情報科学(英語) 助教授 中村 博生  
情報科学(英語) 講師 山本 淳子

本年度は、昨年度の参会者のアンケート結果から、初級と中級に分け自主選択によってクラスを選び参加するという形態で、平成16年8月30日(月)、31日(火)の2日間にわたり講座を開催しました。参加者は17名でした。

初級の1日目は、英語の音声に関する聞き取りと発音の仕方、「外来での会話」のビデオ視聴、聞き取りと発音の練習などを行いました。外来で役に立つ英語表現についてテキスト「看護英会話」を用いて音読したり暗記したりして、実際に患者とコミュニケーションを行うことを想定した練習を行いました。2日目の前半は、外国人講師との実践的な会話練習を行いました。

また、中級では1日目、2日目を通して実践看護英会話用テキスト「Health Talk」を用い、患者の日常生活の情報収集、リハビリテーション、足浴、洗髪などの場面で展開される英会話例を、ビデオを視聴しながら学習しました。2日目の後半には初級同様、外国人講師を患者に見立てて、覚えた表現を使ってロールプレイングを行いました。

受講者の評価は、どの項目においても高い評価を得ることができ、2つのクラスに分けた成果が現れたようです。

(本学ホームページより転載)

#### 5. 看護職員臨地実習指導者養成講習会の実施と今後の期待

学生部長 加藤 光寛

##### (1) 臨地実習指導者養成講習会の経過

臨地実習指導者養成講習会は、看護師など学校養成所の学生の臨地実習の現場において実習の指導者となる者(以下実習指導者)が、看護教育における実習の意義および実習指導者としての役割を理解する、そのために必要な知識・技術および態度を修

得し、看護教育の質的向上を図ることを目的としています。

新潟県では、昭和45年頃から臨床実習指導者講習会が開催されてきました。平成14年に本学が開学し、15年度から、本学が講習会の企画を担当して、講習会会場を本学に移し、16年度から、看護研究交流センター事業として、生涯教育・研修支援部門が担当することになりました。

##### (2) 今年度の講習会の内容と講習生の反応

今年度からは、これまでの定員40名に対して、本学の実習施設の実習指導者枠として10名増の50名にしました。講習の期間は、8月23日から10月8日までの8週間244時間で実施しました。

プログラムの特徴は、①5回の特別授業と一般公開、②15年度から臨地実習で指導の実際を体験、③16年度から実習指導場面の事例を用いた4回のグループワーク、を配置したことです。

講習開始時期に書かれた感想で、講習生の多くは、実習指導の自身の力量や実習環境に対する不安が多く書いていました。実習指導に関する技法32項目の調査で、ケア方法の行動や支持と説明で自己評価は高く、助言、情報提供、応答、説明を伴った例示、ケア実施に関する支持等で、前者より評価は低いものでした。このことは、臨床実践における場面で、自分自身の看護の力量については一定の評価をしているのですが、助言や情報提供など、学生を対象とする指導の場面で、経験がないこと等から、評価が低くなるのではないかと考えられます。

##### (3) 講習生の研修とこれからの期待

実践で行っている看護を、どのように指導するかということ、具体化し、実践していくことが、実習指導の実際です。講習生は、講習での学びを実習指導につなげるために、真剣に臨んでいました。8週間の講習会は、実習指導の不安をやわらげるものと思われまが、概して「教えて欲しい」という気持ちが強く、講習会終了後の感想として表現されていました。事例に基づく実習指導に関するグループワークなどが、講義から学んだ事柄を実践で活用し、指導力につながるだろうことを期待しています。受講したことをどう自分の指導力にしていくかが、ひとり一人の実習指導に於ける課題であると思います。

## 学長特別研究費 研究報告会の開催

### オンリーワン

研究交流委員会委員長 杉田 収

歌詞の「もともと特別なオンリーワン♪」が大ヒットしましたが、研究は元来すべて「もともと特別なオンリーワン」です。オンリーワンは他と違うということですから、自分の感性だけを信じて、先の分からない闇を突き進むしかない孤独な作業が研究であります。しかし混沌とした闇の中で「真実」の光が見えたときの感動、自分の存在の実感…このようなものが研究意欲を支えているように思います。



杉田委員長の開会挨拶

平成15年4月に教員の研究計画書を受理し、審査を行って研究予算配分案を学長に提出しました。申請された研究費総額は約1,330万円余りで、実際に配分された研究費は687万円でした。

平成16年5月には研究結果をまとめて冊子(148頁)にして、6月24日(木)に研究報告会を開催しました。この一連の作業では研究予算の

配分額が問題になりますが、実際は「新潟県立看護大学学長特別研究費取扱要綱」及び「学長特別研究費研究計画書審査における評価の基準」があらかじめ教授会で決定されていたので、それに沿ってほとんど機械的に決められました。

報告は共同研究10編、個人研究15編、延べ63名の教員による研究結果です。報告会で報告された研究結果は、孤独に耐え、オンリーワンをめざし、新潟県立看護大学の歴史に自己の存在を刻んだ、研究者としての教員達の軌跡です。

### 学長特別研究費をうけて

母性看護学 助手 西方 真弓

私は、「母体搬送となった妊産婦の搬送時から分娩までの心理的变化に関する研究」で研究しております。このテーマは、私が産科病棟と新生児集中治療室(NICU)で助産師として勤務していたことがベースになっている研究です。総出生数が減少する中、低出生体重児の出生数は年々増加し、全国で周産期センターが整備され、ハイリスク妊産婦をNICUのある施設へ搬送し管理する母体搬送が増えていきます。

今回の研究では、実際に母体搬送となった女性に経時的に面接を行い、母体搬送から分娩までの経過の中で、心理的状況を語っていただきました。女性が語った内容は、緊張や不安、葛藤など複

雑でストレスの高い状態であることがわかりました。研究をまとめ、多くの方から意見を伺ったことを、今後の研究に活かしていきたいと思えます。

## 報告会に参加して

実践基礎看護学 講師 松下由美子

平成16年6月、学長特別研究費による研究報告会が和気藹々とした雰囲気の中、本学で開催されました。個人、共同で取り組まれたさまざまな研究課題は、参加者の新たな関心や研究動機につながったことと思えます。

私個人では、研究テーマとその内容はもちろんなのですが、それぞれ報告者の方のプレゼンテーション方法にも大変興味を持ちました。例えば、パワーポイントの使い方です。背景の色合い、図表の挿入、フォントのサイズやスタイル、アニメーションの設定で、視覚に訴える情報の印象はずいぶん変わります。報告間際になって、あわててプレゼンテーション構成を上げることが多いのですが、創意工夫された発表をみるとやはりわかり易く、成果報告も研究と同じ熱意を持って完成させることがその研究の成功にもつながることを学びました。

今回の参加で、皆さんから頂いた刺激を今後の研究活動に役立てていきたいと思っています。

## 連載④ 実践基礎看護学講座

助教授 堀 良子

講師 水口 陽子、松下由美子

助手 岡村 典子、籠 玲子

私達は、看護技術は固定化されたものでなく時代とともに変化し発展させてゆくべきものであり、学生はその担い手であると考えています。創造的に学ぶことのできる教育方法や、実践能力の育成として、対象者や状況に合わせて臨機応変で的確な援助を考え実施する力を身につける教育を探求しています。

また、コンピュータに映像を組み入れた学習支援教材の開発、活用なども行い、実習室を開放して自由に自己学習できるように支援します。

〈16年度予定している講座共同研究、個人研究主題〉

- 1 基礎看護技術教育における自作学習教材の導入効果
- 2 他者によるケアが必要な対象者の気道感染予防を意図した口腔衛生状態の改善
- 3 看護学分野におけるコミュニケーションに関する研究の現状
- 4 看護職の役割期待と職業継続に関する研究
- 5 看護学実習指導に関する研究—指導場面の分析

## 第1回臨地実習懇話会の開催と臨床講師の新設

実習部会長 深澤佳代子

実習部会では、平成14年度より、臨地実習指導者と教員の役割および責務について検討し、それらを明文化するなど、臨地実習環境の整備に関する活動を続けてまいりました。実習環境をさらに充実させるために、平成15年度末、臨床講師制度が設けられました。この制度は、学生の実習をサポートするものである一方で、臨床講師となった看護師のキャリアアップに寄与することを願ったものでもあります。

実習施設ごと、臨床講師制度について直接説明に伺い、あるいは文書を送付し、臨床講師をご推薦いただきました。臨床講師の任期は1年間ですが、今年度は最終的に計32名の臨床講師が選任されました。

領域別看護学実習、特に3年次の看護学実習が今年度から開始されるということもあり、6月17日に、各実習受け入れ施設の看護部門代表者および臨床講師を本学にお招きし、臨地実習懇話会を開催しました。本学の教育理念、臨地実習の構造、各看護学領域の実習の説明等、懇談というプログラムを組みました。開催にあたり、中島学長からできるだけリラックスできる雰囲気や、というアドバイスを受け、各領域の教員と臨床講師や実習指導者が同じテーブルに着けるよう配置し、一緒に語り合うことが出来るようにしました。当日は約90名の出席をいただき、大学側からの説明後、各テーブルで実習施設の臨床講師や実習指導者と各領域の教員が和やかに語り合う姿が見られました。当日まで、忙しく準備をしましたが、第1回目にしては成功裏に終了したと考えております。

## 教育組織の紹介



実践基礎看護学講座のスタッフ

## 教育活動

9月より3年次、領域別看護学実習がスタートしました。部会での各領域からの報告によれば、臨床講師の方々にはそれぞれの実習場所で、熱心にご指導いただいているようです。

次年度に入るとすぐに、地域看護学実習が開始され、本学の領域別看護学実習がひととおり完成することになります。今から、実習部会として次年度の臨地実習懇話会のテーマなどを検討していかなくてはなりません。

会の開催にあたり、配布資料準備から当日の受付、会場準備など本学の教職員の方々から多くのサポートを得ました。また、会への参加のため、実習施設の皆様に多くの時間をいただきました。この場を借りて、心よりお礼を申し上げます。



実習施設の皆様を多数お迎えして

## 1. 平成16年度 学長特別研究費採択研究課題

平成16年6月、計画書の書類審査および申請者に対する面接を経て、下記の通り、今年度の学長特別研究費による研究課題21題の採択が承認されました。

### 共同研究

研究代表者	研究課題
野地 有子	(学長委託課題) 看護領域別演習科目におけるPBLチュートリアル導入の効果
加城貴美子	接地足跡面からみた足の矯正指導と性周期ホルモンに関する基礎的研究
堀 良子	基礎看護技術教育における自作学習支援教材の導入効果
酒井 禎子	看護師が認識しているスピリチュアリティに関する研究

### 個人研究

研究代表者	研究課題
杉田 収	ワインの抗酸化能に与える亜硫酸ナトリウムの影響
堀 良子	他者によるケアが必要な対象者の気道感染予防を意図した口腔衛生状態の改善
橋本 明浩	体験的情報処理の原理を学ぶ教材作成に関する研究
井上みゆき	看護師からみたNICUに長期入院している子どもの問題と課題
大友 康博	医療生活協同組合による無床診療所経営に関する研究
後田 稔	グラウンデッド・セオリー・アプローチによる精神障害者の障害受容過程の探求
岡村 典子	看護学分野におけるコミュニケーションに関する研究の現状
高塚 麻由	母乳育児が困難な状況にある母親の心理状況と求める介入
金井 幸子	慢性疾患の子どもを受け持った経験のある教諭の困難～学校と医療機関の連携をふまえて
西方 真弓	母体搬送となった女性の搬送時から産後1ヶ月までの心理的变化に関する研究～母体搬送で入院した女性の出産から親役割獲得のプロセス
飯田 智恵	豪雪地域における高齢者の日常生活活動量の季節変動
籠 玲子	看護職の役割期待と職業継続に関する研究

## 2. 「高校生のための授業見学」の実施

平成16年5月から7月にかけて、本学の1、2年生に開講されている2科目が、高校生に向けて公開されました。科目は『形態機能学Ⅱ』（関



担当者による事前説明

谷教授)と『基礎看護学技術演習Ⅱ』（堀助教授)であり、合計36名の高校生の皆さんにおいていただきました。実際には、本学の特色などについて担当者から説明を受け

たあと、在校生と一緒に教室で授業に参加していただきました。「教室の人数、マイクやコンピュータ画像を使った授業など、高校とは大違い」「ディスプレイが大きくてとても新鮮」「スピードが速くてついていくのが大変」などの意見が聞かれましたが、皆さんとても興味深そうでしたし、在校生にもよい刺激となったようです。次年度も同様の企画を予定しています。



受講中の参加者

## 3. 文献検索講習会の開催

今年度、4月から8月にかけて、本学図書館では学生向け講習会のほか、学外者にもご参加いただける文献検索講習会を計8回開催しました。内容は、本学図書館資料の探し方、他の図書館資料の探し方・利用方法、医学中央雑誌など雑誌論文の探し方などであり、阿部司書が講師をつとめました。



講習風景

## 異文化シャワー 老年看護学 助教授 北川 公子

2003年12月29日から2004年3月17日まで、Portland State University を基地として米国での高齢者ケアに対する知見を深めることを目的に研修を行いました。上記大学の Extended Studies Office という生涯教育部門に相当する部署が企画する International Special Programs というコースに籍をおきながら各種レクチャーに参加し、見学・研修に出かけました。一定のコースに在籍する関係から、ビザの取得や健康診断書の提出を求められ、出発までの数ヶ月間、準備に相当神経を使いました。

主な研修先は、Mary's Woods という高齢者総合施設、Adult Foster Home, IKOI-NO-KAI というデイケアで、いずれも民間の機関でした。Mary's Woods は当地において費用が高いことで有名らしく、入居料1,500～3,000万円という説明でした。終身で利用できるよう障害別に複数のユニットがありましたが、いずれも多床室という発想はなく、全て個室でした。別の機会に見学した総合病院も同じで、IUC でもパーソナルスペースがしっかり確保されていました。Adult Foster Home は日本の痴呆性高齢者グループホームに似ています。利用者の上限は5人。日本との最大の違いは、ホームが介護スタッフの家にもなっている点です。研修先のスタッフであるキャサリンは、2人の子どもと一緒にホームの1階部分に住んでいました。勤務時間は9～21時。夜間は定時の見回りとコールへの対応。週休と年休時には交代要員が派遣されるそうですが、それ以外はキャサリン一

人です。IKOI-NO-KAI は日系人一世のために始まったシニア・ランチ・プログラムでした。昼食前に三々五々集まり、昼食をとって三々五々解散するという実にあっさりとした内容でした。

街中や大学構内でも、多くの車椅子利用者を見かけました。電動車椅子の背にポケットを積んでコーヒーを販売している方もいました。施設で、不安そうに徘徊する痴呆の方に、熱心にスタッフが付き添うこともなく、食事を残せばそれ以上勧める様子もなく、子ども向けの歌や遊びもなく、日本型高齢者ケアを見慣れている私には何か物足りなさも感じられました。しかし、自己と他者の境界線をしっかりと保つことが彼らのケア、および制度の根底にあることも察せられました。レクチャーでも、ホームステイ先でも、何度も「あなたのopinionは?」と聞かれました。常にそのように問われる文化の中で、この距離は当然なのかもしれません。とするならば日本の高齢者ケアにふさわしい距離とは…、と考えながら研修を終えました。

研修でも実生活でも語学に苦しむ日々でしたが、3か月間の異文化シャワーは、“わかることの深さ”を強くわからせてくれました。海外研修制度をつくり、機会を与えてくださった大学と、不在中のサポートをしてくださった同僚に深く感謝します。



コーディネーターのジェフと

## 継燈式～大きな未来へ、羽ばたこう～

継燈式実行委員会 第2学年 板倉 薫、大竹 康晴、岡田瑠美子  
近藤 春菜、佐久間智子、星野 泰慶

2004年9月13日、私たち2学年は、「継燈式」というセレモニーを無事挙行することができました。今年は暑さが心配されましたが、途中で倒れる人もなく、全員で素晴らしい式にすることができました。

私たち継燈式実行委員は、去年先輩方が作りあげた「継燈式」を引き継ぎながら、学年独自の何か新しいものを取り入れた式にしようと考え、2月から活動を開始しました。実行委員が中心となった学生主体の式とあって、企画や準備にとっても苦勞し、毎日忙しい日々を送りました。しかし学年みんなが協力してくれたおかげで、実行委員が作った「継燈式」ではなく、2学年皆で作りがあげた「継燈式」となったことをうれしく思います。この期間で継燈式実行委員は、学年の良い所をたくさん発見し、貴重な体験をさせて頂きました。

私たち2学年はこの式で、初めての臨地実習の第一歩を踏み出しました。「継燈式」を行ったことで、学生の実習への意識が高まり、また、自分は看護に携わっていく者だという自覚がはっきりしたことでしょう。そして、ナイチンゲールに灯る一つの“燈”から灯された、学生1人1人のキャンドルの燈を皆で共有することで、互いを支え合いながらがんばろうという気持ちが高まったと思います。

2学年は10月下旬に初めての臨地実習を終えましたが、ひとりひとりがそれぞれの思いを胸に抱き、実習に臨んだことだと思います。これからも「継燈式」で誓った思いを忘れずに、日々頑張っていこうと思います。

最後に、「継燈式」を無事挙行することができたのは、深澤先生をはじめ、先生方、事務の方々、先輩方が私たちを支えてくださったからです。本当に感謝しています。ありがとうございました。



## 学生活動

## 大学祭を終えて

大学祭実行委員長 第2学年 小沢 友信

2004年11月13日(土曜日)、第3回桜蓮祭の開催にあたり、たくさんの方のご協力のおかげでこの日を迎えることができました。私は昨年の大学祭が終わると同時に、今年の大学祭の実行委員長になることを決意しました。4月に実行委員が決まり、5月の初めから半年後の大学祭を目指し、2年生9人、1年生8人の計17人で構成された大学祭実行委員会は活動を始めました。

思っていたほど楽な仕事ではありませんでした。学生全体をまとめる大変さに、日々苦悩していました。しかし、各企画、各担当者、学生みんなが大学祭というひとつの目標に向かって、毎日放課後遅くまで残って準備をしている姿を見て、とても励まされたものです。特に短大専攻科、大学3年生の



ようこそ桜蓮祭へ

みなさんは、実習中にもかかわらず協力してくださり、本当に感謝しています。そういったみんなの協力のおかげで大学祭当日には、多くの一般来場者をお迎えすることができ、成功のうちに幕を閉じることができました。大学祭の企画に携わってくださったみなさん、本当にありがとうございました。

私自身、この大学祭を企画・運営するにあたり、たくさんの方のアドバイスを学びました。この経験を今後の大学生活、人生の中でいかせたらと思っています。また来年、次の大学祭実行委員会が素晴らしい大学祭を創ってくれることを期待して、私の役目を終わらせていただきます。本当にありがとうございました。



■サークル活動 連載③

English Club (英語サークル) freshman Saori Ogawa (第1学年 小川沙織)

Let me introduce our English club to you. We enjoy learning English through using it. Only English is used in our club. We do many activities, but the main activity is discussion. For example, when we watch movies, we talk about our impressions and hero or heroine's feelings and other things.

We also memorize useful phrases using textbooks of English radio conversation programs as well as listen to English songs.

It is rare for us to speak in English in our daily lives, so we need to practice saying what we want to say in English. We plan to meet more often to brush up on our English speaking ability. Come join us!

(訳:英語サークルを紹介します。サークル時間は英語オンリーです。色々活動がありますが、主にディスカッションをしています。映画を見て登場人物の気持ちを話し合ったりしています。他にラジオ講座の表現を覚えたり、歌を歌ったりしています。日常英語を使うことはあまりないので、言いたいことを言えるよう練習する必要性を感じています。話す力を伸ばすためにもっと定期的に活動したいと考えています。仲間に入りませんか?)



ALTを招いてのディスカッション

入試関連情報

1. これまで行われた入学試験の結果

	3年次編入学試験	特別選抜試験	
		一般推薦	社会人特別選抜
実施日	平成16年9月8日	平成16年11月20日	
募集人数	10名	30名	若干名
受験者数	25名	43名	9名
合格者数	10名	31名	1名

2. 今後の入試日程

①一般入試(前期) 平成17年2月25日(金)

②一般入試(後期) 平成17年3月14日(月)

お問合せ、募集要項の請求は本学教務学生課教務係(電話 025-526-2811)までご連絡ください。

編集後記

水害、地震と、立て続けに災害に見舞われた2004年の新潟県でした。このような災害時、本紙にしる、ホームページにしる、何が大学の広報として人々にお伝えすべきことなのか、その判断に迷い悩むことの多い日々でした。編集を終えた段階でもその迷いが解消されたとはいえません。しかし、被災地とそこに暮らす人々に心を寄せ、それぞれの立場で、できる活動を行ってきた学生・教職員が数多くいたということは、学外の方々に向けてお伝えできる事実です。

[広報委員会 北川公子]



新潟県立看護大学

Niigata College of Nursing

本学ホームページ  
http://www.niigata-cn.ac.jp

広報委員会

〒943-0147 新潟県上越市新南町240番地  
Tel 025-526-2811 Fax 025-526-2815  
E-mail soumu@niigata-cn.ac.jp

発行日: 2005年1月11日

